

たいせつであり、第二に地域の特質を  
考え、身近なものに対する関心を高め  
再発見をする喜びも感じとらせる。第  
三に、造形的な学習に児童が興味と関  
心をもつように組み立てていくことが  
たいせつなことであって、教科書を教  
えるのではなく、それを主たる教材とし  
て指導を進めることが再確認された。

実習として、壁飾りの製作を行い、  
自作の完成品を飾ることの喜びを体得  
し、作品の合評会を行い、作品の見方  
感じ方を深めることができた。

## (2) 中学校美術講座

### 工芸の部

〈金属による工芸。厚い金属板を用  
いての工作〉

教材として金属を取り扱うことは施  
設設備などから難しいこともあるが、  
比較的學校で取り組み易く、応用ので  
きる題材として、真ちゅう板を利用して  
の文鎮兼ペーパーナイフの製作を試みた。  
〈木材による工芸。ベニヤ合板によ  
る器物の製作（積層による）〉

木材の入手が困難になりつつある折  
何十人も生徒が同一条件の必要じゅ  
うぶんな素材を与えることは容易では  
ない。そのようなとき、立体の形状を  
得る一つの方法として板材の層を何枚も  
重ねて接着剤で張り合わせる方法がある。

講座では、ベニヤ合板をもとに、使  
う工芸品の製作実習をとおして構想と  
製作、材料と技法、行為と道具の関係  
を知り、創造表現の喜びを体験するこ  
とをねらいとして器物の製作を行い、

完成後合評会を持つことにより、今後  
の生徒指導のための方策をも検討する  
ことができた。

### 彫塑の部

#### 〈彫塑（頭像の制作）〉

彫塑表現の特性、モデルを使つての  
制作の意味、デッサンの役割、人体骨  
格と筋肉などについて講義を行い、実  
際のモデルによる頭像の制作をした。

完成後合評会を持ち、彫塑における  
評価について考察し、彫塑学習におけ  
る指導や評価においてたいせつなこと  
は、記憶によるものと写生によるもの  
の指導のねらいや、指導の進め方のちが  
いをじゅうぶん研究しておく必要がある  
指導のねらいをはっきりさせておくこと  
によって、評価も適切となり指導計画の  
たいせつなことが確認された。

#### (3) 高等学校美術・工芸講座

##### 〈陶彫（土のオブジェ）〉

前期はオブジェと陶彫の接点を考察  
し、表現方法として、平板と立体とが  
あるが、バリエーションを育てるため  
にも今回は寄せ型による土のオブジェ  
を行った。各自のイメージデッサン  
をもとに、粘土を使つて立体の原理につ  
いて探求し、石こうによる寄せ型二つ  
割り方式で、土張り、成型、仕上げと  
各自のイメージにより、それぞれ独創  
的な形の主張のある作品ができ上り、  
じゅうぶん乾燥させたのち後期で焼成  
完成させることにした。

後期は作品の完全な乾燥がみられた  
ので作品の窯入れ、焼成を行い、平行

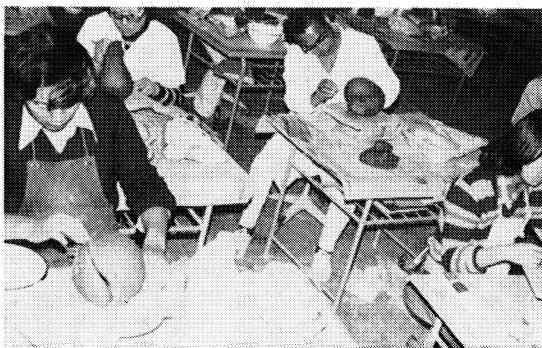
して石こう型取り法と、じかけ法によ  
る石こうのオブジェの制作を行った。

身近な材料でしかも制作過程での失  
敗も少なく、構想を豊かにする題材と  
して制作意欲もまし、単純化された形  
の中に個性的な作品ができた。

また、十六ミリ映画による「創るよ  
ろこび」他数本を鑑賞し、芸術という  
ものが、どうすれば生み出されるかの  
筋道を教えることのでたいせつさを痛感  
させられた。終わりに前期・後期の苦  
心の完成作品を並べ合評会を行い創造  
の喜びを味わった。

#### 〈鑑賞指導法〉

鑑賞能力を育成するためには、単に  
感覚面から対象の印象を享受する受動  
的な態度だけではなく、客観的な価値



美術・工芸講座「土のオブジェ」

の判断ができる能動的な態度の育成を  
も必要とされることであり、これを別  
なことばでいえば主観的立場と客観的  
立場の融合による鑑賞が望ましいこと  
であるとされた。

鑑賞の評価は、鑑賞すること自体は  
生徒個人の精神の内部現象であり、こ  
れを客観的に評価することはむずかし  
いことである。しかし、指導の目標を  
具体化し、評価の観点を明確にし、そ  
れに適した方法を見つけたす努力とく  
ふうが必要とされることの重要性が確  
認された。

#### おわりに

以上、講座の概略であるが、講師の  
先生がたの適切な指導助言と、受講の  
先生がたの熱心な研究態度と制作態度  
に支えられ、予想以上の成果をあげる  
ことができた。

第一日目の講座内容説明のときは、  
四日間の日程で制作の成果がじゅうぶ  
んあげられるかどうかなどの不安な様  
子も見うけられたが、講座が始まると  
休み時間をとるのももどかしい感じの  
制作意欲で、その日の講座終了後も講  
義室での継続制作がなされたり、更  
には宿泊棟における自主研修をされて  
の作品制作であったので、全日程終了後  
の満足感は、文字どおり創造の喜びそ  
のものであったことであろう。

一人でも多くの先生がたが今後も研  
修に参加されることを祈って紹介の結  
びとする。